



北高夢ロード通信

第8号 (2021.3)

コロナ下のコミュニケーションと文化

会長 波多野宏之

2020年度はコロナに翻弄された一年となりました。4月に首都圏や福岡県で非常事態宣言が出されるなか、4月末総会の延期を決め、最終的にはリアルな総会開催を断念し、7月末、会報の郵送に合わせて、書面で総会に参加していただくことに。こうして、一部の活動を除き秋からの始動となり、ギャラリール来場者にはマスク着用、検温、手指の消毒等をお願いするほか、三密を避けるためギャラリートークなどは中止。例年4回の展示会は、今号報告のように11月と1月の2回だけの開催となりました。

首都圏等に比べ下関市、とりわけ豊北町での感染懸念は小さいとは言いながら、入場者の減少は否めず、1月の展示では天候不順もあって入場者ゼロの日もありました。ギャラリールでのデッサン教室は中止し、北高「地域探究」授業も、かなり限定した形での実施を余儀なくされています。(別項参照)

雨傘の貸出や年度始めの下関北高新生歓迎幕の掲出(同窓会と共同3.30~5.28)にもかかわらず、北高生徒と当会メンバーの接触の機会のごく限られたものとなり、そのこともあってか、最近、通学時の生徒の挨拶が希薄になったと感じることがあります。お互いにマスクをし、あるいは、スマホに熱中する生徒も散見され、数少ない一般通行人もギ

ャラリールに見向きもしない、といった傾向が顕著なこのごろです。人と人とのリアルな接触がコミュニケーション、ひいては文化にとっていかに大切か。ゴリラが専門の霊長類学者山極寿一氏(京大前総長)は、次のように言っています*。

「人間が社会を作る上で欠かせない、移動する、集まる、対話するという三つの自由が大幅に制限されてしまった。」オンラインやテレワークで対話は何とか保たれているものの、「人間が社会生活を送る上でとても大切な能力が衰え始めていると私は感じる。それは文化的な暮らしをデザインし、実施する能力だ。」ゴリラの3倍の脳を持つにいたったのは、言葉の登場以前に「身体の動きを他者に同調させ、リズムに乗りながら全体を調和させる音楽的なコミュニケーションだ。」

スマホを見て歩くのではなく、人と挨拶し、たまには道草を食ったりして、「集まりリズムを共有する試み」(山極)を怠らないようにしたいものです。こうした観点からは心苦しいところですが、p.8に記しましたように、不測の事態を避けるため2021年度総会も昨年同様、書面による開催といたします。そのうえで、可能な範囲で、コミュニケーションのリズムを生み出せるような活動を展開していきたいと思っています。

*山極寿一「コロナ 縮む社交の場 文化の力奪うオンライン(科学季評)」(朝日新聞,2021.2.11朝, p.11)

ギャラリー＝夢ロード第9回展 にい みずよし切り絵展

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、5月の開催予定が二転三転した「にいみずよし切り絵展」ですが、11月3日（火）～15日（日）の日程で何とか開催の運びとなりました。残念ながら切り絵展開催期間中に予定していたミュージック・トークは実施できませんでしたが、多くの方にご来場いただき、女性像をモチーフとし、様々な主題を象徴的に表現した繊細・華麗かつ妖艶な世界を堪能していただきました。

切り絵と言えば、滝平二郎の「花さき山」や「モチモチの木」の切なくて温かい郷愁を誘う場面しか思い浮かびませんでした。しかし、「にいみずよし」の切り絵は、そうした先入観や切り絵のイメージを打ち砕く全く別次元のアートでした。正にこれまで目にしたことの無い「息を呑む繊細美」そのものです。

滝部という山陰の小さな田舎町で、こうした都会的な最先端の芸術作品に触れることの幸せを感じるとともに、一人でも多くの地域住民に鑑賞してしてもらいたいとの思いで、豊北生涯学習センターに巡回展示していただきました。夢ロードでの展示を見逃した方や、センターだよりの情報で興味を持たれた方など、来場者はこれまで見たこともない作品の繊細美に魅了されました。



滝部だから見に行ける方、特牛の学習センターだから足を運びやすい方など、少しでも多くの方の便宜をはかるためにも、ギャラリー＝夢ロードと生涯学習センターとの連携がこれからも続くことを願っています。

（文責：白岡勝典）

ギャラリー＝夢ロード第10回展 藤田亮爾「抽象の小宇宙」

当初、昨年6月開催を予定していた展示です。藤田さんは、前年の12月から絵日記のように日付を入れた鉛筆画をほぼ毎日のように描き続けられ、4月頃には展示できるほどの枚数に達していましたが、しかし、その後、コロナ禍を受けて会期を秋に延期したため、8月初旬まで制作を続けていただきました。

こうして描かれた全66枚という、これまでにない枚数を展示するため、ギャラリーの固定壁面（2面）のほか、展示棚（2面）の前面に仮設壁を設置し、全体を取り囲む4面展示を実現しました（パノラマ写真参照）。これには、従来、壁面の整備に腕を奮っていただいている「藤岡工務店」こと藤岡理事に負うところが大きかったです。

一連の作品は日々の想念を視覚化し、変幻自在に変化させていくもので、例えば、「太陽コロナ」を題材とした4作（2020.1.7～10）は暗示的であり、非常事態宣言期の「新型コロナウイルス」を標題とした6作（4.4～16）は、コロナ禍の日常を表現していて胸を刺されるようでした。

展示期間中（1月19日（火）～31日（日））は、コロナ禍に加え例年になく寒波にも見舞われ、吹雪の日など入場者ゼロといった日もあって全体として入場者が少なかったのが惜しまれました。（文責：波多野宏之）



2020年度下関北高 地域探究授業サポート報告

さあこまったぞ。地域探究授業・自然環境グループの授業サポートはどうするか。今年度の授業サポートはいろいろな課題に直面しました。まとめれば課題は以下の三点に集約されます。

1. コロナ禍での授業なのでできるだけ車の移動は避け、校地内、あるいは校地に近いところでのフィールドワークにする。
2. 高3・高2の生徒の合同授業で、高3の生徒の中には昨年に高2で参加した生徒さんもいる。まったく昨年と同じことはできない。
3. サポート活動への助成金申請を行ったが、却下されたので、これまでの助成金で確保された資材を使ってのサポートになる。

1年を終わって改めてわかったことの一つは、このサポート活動はこの地域の人々の、また団体の下関北高の生徒さんのためなら喜んで力になりますよというボランティアな好意に支えられているということです。北高夢ロードだけでできることではありません。今後、お世話になり続けることになります。北高夢ロード豊北の水班の役割は高校生と地域をつなぐことに尽きるといってよいでしょう。3月、4月、5月の2021年度のサポート準備期間は、地域の方々との語り合い、協議。説明が中心になります。

改めてわかったことの第二は、生徒さんにとっては自然の諸物に、土であれ、石であれ、動物であれ、植物であれ、体を動かし触れることが楽しく、彼らの内に静かな感動を呼び

覚ますということでした。

改めて確認できたことの第三は、教材は身近なところに宝物として存在していることの発見です。身近にあるところの自然の一つを、興味を持って追いかければ、思いがけない展開が向こうからやってくるという経験、経験とまで行かなくても、予感のようなものを生徒さんと共有できたということでしょうか。

第四の気づきは、授業サポートを主導していただいた藤岡さんが生徒さんに促した「発見したこと、感動したことを自分の言葉で表現してみなさい」という挑戦を生徒さんがトライしてくれたことです。若い力は素晴らしい。

授業展開サポートは藤岡、岡崎で行いました。授業は毎週木曜日の12:50~14:30の2時間連続のフィールドワーク。参加生徒は14名。担当の先生は2名。内容は北高校門前の久森川の中の生物観察・水田の生物観察・久森の地層の露頭観察、校地の近くでの粘土の体験・向坊の山での粘土堀、畑での菖蒲の株植え、学内では採取し粘土での陶板づくり、栗野川流域立体地形図づくりの準備、山口県の地質図、角島灯台の見学と研究と見学者への説明の準備。生徒さんのリード、細かな連絡調整をしていただいた担当の先生方に感謝申し上げます。

(文責：岡崎新太郎)



ふるさと納税で北高支援



下関北高のホームページに、“【ふるさと納税】の利用で、図書充実”のトピックスが掲載されていました。生まれて初めて、納税が自分の望む用途へ明確に利用されている現実を眼の当たりにし、何とも言えない充実感を体感しています。北高夢ロード実行委員会では、山口県外在住のOBに働きかけ、【ふるさと納税】のシステムを利用、下関北高を魅力ある未来像に繋げ、教育活動の更なる充実を支援すべくご協力頂きました。誌上を借りて御礼申し上げます。但し、新型コロナ、活動のPR不足、手続きの不徹底、等で募集結果は全く満足できるものではありません。2021年度も引き続き支援活動を行います。今回、《払い込み取扱票》が付属されたり一フレット『つながる。やまぐち応援寄附金』と下関北高校の活動振りを示す『山口県ふるさと納税の募集』を配布、改めて、詳細手順をご案内します。資料中の《払い込み取扱票》の通信欄に下関北高校宛て《番号：④-43》を記入、振込手続を実施後確定申告又はワンストップ特例申請で税控除が受けられます。山口県ふるさと納税Webサイト

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a10700/furusato/top.html> をご参照ください。

県外在住、関係各位におかれましては引き続き本活動へのご協力を頂きます様、宜しくお願い致します。

問合せ先：北高夢ロード実行委員会 城石郁裕

[tel: 09049697099](tel:09049697099) / japolo1329ik@gmail.com

(文責：城石郁裕)

『豊北高校74年のあゆみ』の頒布

山口県立豊北高等学校は、令和2年3月1日をもって山口県立下関北高等学校へ継承された。閉校の記念誌として「山口県立豊北高等学校74年のあゆみ実行委員会」より『豊北高校74年のあゆみ』が発行された。微力ながら北高夢ロード実行委員会も冊子販売のお手伝いをさせていただいた。会員の方々に販売の経過について以下お知らせする。

まず、2020年10月始めに第9回展の案内チラシとともに『豊北高校74年のあゆみ』のチラシも同封したところ、すぐに申し込みが数件あり、郵送による販売を行った。11月と1月に開催されたギャラリー展でも会場にあゆみ冊子を置き、販売させていただいた。ギャラリーでは、実際に冊子を手にとって見ることができたということもあり、買って帰られる方が多く、特に11月の展示会の際には、来場者の多くが買って下さった。

『豊北高校74年のあゆみ』は、A4サイズ47頁からなる冊子で、カラー写真も多く掲載され、価格は500円と市場の冊子と比べると大変安価である。一冊でも多く、同じ高校へ通った人たちのもとへ届けたいという気持ちで努力されたものと思われる。編集・発行元のあゆみ実行委員会の豊北高校卒業生への又は閉校となった豊北高校そのものへの深い愛情が感じられる。



令和3年2月末までに北高夢ロード実行委員会が販売した総数は、39冊であった。

(文責：磯部珠枝)

角島灯台の重文指定に思う

昨年の12月12日、角島灯台ほか3つの灯台が国の重要文化財に指定された。全国には、大小約3300基の灯台があるが、この指定は4灯台が文化的価値の頂点にあることを示した。しかし、この事実はいかにも地味で、合点のいかない人が多いであろう。そこで、灯台ファンの一入として、その意味を考えてみた。

日本海航路の要、下関海峡

今から150年前の1868年といえば、だれもが知っている明治維新であり、日本が近代化に向けて大きく舵を切ったとされる。

近代化とは何か。簡単にいえば、西洋の近代的技術を日本に移植し、富国強兵を図ることである。明治政府は、当初、雇い入れた外国人から直接に技能を学ぶ方法をとった。その第1号お雇い外国人が英国の灯台技師、R・H ブラントンである。彼は戊辰戦争が終わった明治元年に横浜港に到着する。そして江戸条約や大阪条約に基づいて灯台を建てていった。

明治政府が灯台建設を先行させた理由は、当時、外国船からの物流が交易の中心だったためである。日本周辺には岩場や浅瀬が多く、大型汽船は危険であった。そのため灯台建設は必須で、おもに太平洋側に配置されている。しかし、江戸から明治にかけて日本の物流の中心は北前船や廻船である。瀬戸内海から関門海峡を抜け日本海に出る航路こそ、最も重要であった。血液が全身を巡るように、近代化という栄養を海運によって巡らせていく。この航路の安全を保障する灯台建設こそ重要だ、という歴史的視点がこれまで欠けていた。

今回、国の重要文化財に指定された4つの灯台＝犬吠埼灯台（千葉）・部埼灯台（北九州）・六連島灯台・角島（下関）のうち3つが、下関海峡に集中しているのは、ここが明治の物流の要であったことを物語っている。

下関海峡周辺の灯台位置

- ① 角島灯台
- ② 特牛灯台
- ③ 蓋井島灯台
- ④ 六連島灯台
- ⑤ 部埼灯台
- ⑥ 白洲灯台

下線＝国の重要文化財に指定された灯台
※いずれの灯台も明治に建設されている。



どれをとっても日本一

灯台めぐりを始めて25年、最初は気楽な旅行が、めぐって行くうちに虜になってしまった。角島灯台は、一等レンズの巨大さ、御影石と煉瓦の二重構造、巧みな石職人の細工、立ち姿、どれをとっても日本一である。灯台守が舞台の「喜びも悲しみも幾年月」という映画があった。出産もままならぬ僻地生活に耐えながら、嵐の夜も人知れず船の安全航行を見守った彼らが守り抜いたもの。それを現地で感じる喜び。私は、今も灯台めぐりをやめられないでいる。

（文責：藤岡達雄）



『しかけ絵本展』に向けて

今年の秋に開催予定の『しかけ絵本展』の企画・準備のお手伝いをしております、東京で図書館司書をしている伊藤と申します。

「しかけ絵本について調べてみませんか？」
昨年春頃、東京在住の賛助会員で、この企画の発案者である村上さんからの一言がきっかけで、しかけ絵本調査が始まりました。まだ書店などで紹介されていない作品に注目して、珍しい仕掛けやデザインのことを調べていますが、世界中の作家が様々なアイデアと技術で作品を発表していることがわかりました。“しかけ絵本“というと、ポップアップする作品が有名ですが、”しかけ“の表現はとて幅広く自由で、本という形状に囚われていないもの、音を奏でられるもの、とても緻密で芸術的な作品など様々です。紙という素材で表現できること、可能性は、こんなにもたくさんあるのか！と驚いてしまいます。

今回の展示では、波多野会長のコレクションも見せていただけるということで、私もとても楽しみにしています。この『しかけ絵本展』では、作品を鑑賞するだけでなく、実際に触れられる展示にしたいと思っています。

新型コロナ感染症の影響により、最近ではなかなか集まる、触れる、ということが難しくなりましたが、しかけ絵本を通して、宝箱をあけるような、新しい扉を開くよう



な、そんな気持ちで、絵本の世界を体感し、楽しんでもらえる展示にしたいと思っています。
(文責：伊藤祐里子)

栗野に重中美術館誕生

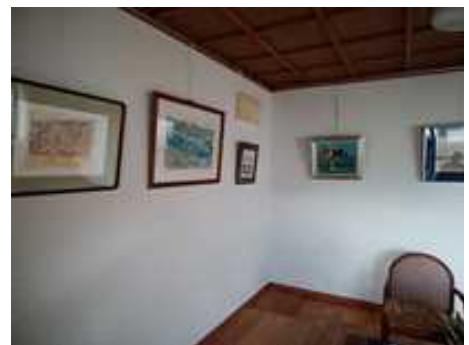
2020年11月、栗野駅前に私設の重中美術館が誕生したと耳にし、暮れに出かけてみました。栗野川共生会会長や豊北郷土文化友の会副会長も務められている重中十士明（しげなかとしあき）氏が邸宅の2室を展示場として公開されたもので、親しくご案内いただきました。

重中氏は長く放送記者として活動され、各地でのさまざまな出会いの中で収集された絵画や版画のうち、目下、約20点が展示されています。鍋木清方をはじめ、山口県ゆかりの香月泰男の版画、小林和作や松田正平の油絵、また、豊北高校卒業で当会メンバーでもある木版画家西嶋勝之氏の栗野川風景を描いた作品などもありました。他にも展示されていない作品が約同数あるとのこと。

2室のうち、1室は洋室で壁面がよく整備され、もう1室は和室のままですが、展示のための工夫がなされています。

その後、重中氏は都合で東京に住まわれるようになりましたが、作品は引き続き展示されており、観覧ご希望の方は、近隣のオリオン美容室（桐沢芳美さん083-785-0445）に事前連絡をされれば、ご案内いただけるとのことです。（無料。ただし、毎週月曜日、第1火曜日、第3日曜日を除く）

（文責：波多野宏之）



北高コミュニティ・スクール この1年

下関北高校はコミュニティ・スクールの仕組みを生かし、地域と連携した教育活動に積極的に取り組んでいます。大きく分けると、①地域の自然・文化にふれる学習、②地域の産業等にふれる学習、③地域の人にふれる学習、④地域に貢献する活動の4つです。その中でも特に力を入れた取組、自慢できる取組を紹介します。

滝部駅に壁画を設置

2年生の活田瞳さん、河田大輝君、来見田龍君の3人は、「地域に色を」をスローガンとして、高校生の元気と豊北町の風景を地域に届けようと、壁画を制作しました。地域に色があると町の活性化にもつながり、この絵を地域の方はもとより市外や県外の方に見ていただくことにより、豊北町の魅力を発信できるよう、12月16日からJR滝部駅に展示しました。



観光パンフレット～片道切符を添えて～

3年生の清水麻衣子さんが、地域の活性化に少しでも貢献したいという思いで、下関市役所豊北総合支所と豊北町観光協会からの助言や協力を得て、豊北町の観光パンフレットの英語版と日本語版を作成しました。パンフレットは道の駅「北浦街道豊北」や「しおかぜの里角島」などに置いていただくことになりました。本人はパンフレット作成に次のような思いがあると言っています。この観光パ

ンフレットに、海外の方に豊北町の良さを伝えたいという思いの他に、北高生に向けてのメッセージも込めました。それは、「自分が使った時間は必ず自分の味方になる」ということです。“卒業”が近づくにつれ、高校生活は一瞬だなあと痛感しています。高校生全員に時間は平等に与えられるにも関わらず、人によってその時間の活用法は千差万別。私たちが手にしているのは3年間という有効期限のついた片道切符だけ。旅の途中で私が見つけた夢の一つがこの観光パンフレットです。



角島大橋開通20周年記念イベント

今年は角島大橋開通20周年を迎えました。それに伴い、11月2日(月)から7日(土)まで「下関ドライブインシアター2020」が開催されました。下関北高校ではこの期間、下関市役所豊北総合支所等と連携し、しおかぜの里において、ハロウィンかぼちゃのランタンの展示やライトアップなどを実施しました。



(文責：秋枝一成)

武士道とは

以前たまたまテレビのチャンネルを変えている最中に、居合道の達人の実力はどうかという番組をやっている見入ってしまいました。毎日毎日一人で黙々と真剣を振る居合道の達人がどれほどの実力があるのかを、格闘家のニコラス・ペタスがレポーターとして挑戦する番組でした。ニコラス・ペタスといえは空手家大山倍達の最後の内弟子といわれ、K1で武蔵を破り、日本王者になったこともある格闘家です。その彼が、70歳近い居合の達人に挑むのです。模擬刀を両者が持ち、両膝をつきペタスがいつでも斬りかかってよいという設定でした。ペタスは自信満々で何かこんな年の人に本気を出していいのかという様子でした。しかし、刀に手をかけ抜こうとした瞬間、達人の刀はペタスのこめかみの所に当たっていました。それも二度とも。「真剣ならば私は斬られていましたね」とニコラスは苦笑いを浮かべていました。興味深かったのはペタスが居合道の最終目的は何かと聞くと「抜かずに勝つこと」であると達人は答えたことです。対峙した時、戦ってもとても勝ち目はないと相手に悟らせること、居合道のたゆまぬ心身の鍛錬によって、気迫で相手を律し、抜かずに勝つ、それが居合道であると。無意味な争いをしないために人間を磨いていくことが居合道なんですね。その精神を武士道と呼ぶのでしょうか。今の世の中、ムダな争いが多すぎるように思います。言葉という剣を武器として振り回す人があまりにも多いのではないのでしょうか。今こそ現代版の武士道が必要かもしれません。私が考える武士道とは、「フェアプレイ」だと思います。卑怯なことはしないということが武士道の神髄ではないのでしょうか。今の自分はどうか、胸に手を当てて、考えてみたいものです。

(文責：秋枝一成)

2021年度総会のご案内

2021年度北高夢ロード実行委員会総会を開催いたします。コロナ下での不測の事態もなお想定されますので、昨年度同様、書面(郵送)による総会とさせていただきます。

正会員の皆様におかれては、本「会報」第8号に同封いたしました「2021年度北高夢ロード実行委員会総会 議案書」をご参照のうえ、同封の葉書の「賛」「否」のいずれかを○で囲み、所定の事項をご記入の上ご返送ください。

返送期限：2021年4月24日(土)

当日事務局到着分をもって集計いたします。

なお、議決権を有するのは会則第12条により、正会員のみですが、賛助会員の皆様にも議案書、葉書を同封しております。通信欄にご意見、ご要望などを記入のうえご返送いただければ、今後の活動の参考にさせていただきます。

会費納入のお願い

2020年度会費を未納の方は同封の振替用紙で、正会員2,000円をお振込ください。

郵便振替

口座記号：01350-1

口座番号：106942

加入者名：北高夢ロード実行委員会

北高夢ロード通信 第8号(年2回刊)

2021年3月20日発行

編集：会報編集委員会

(秋枝・古田・村上・戸田)

発行：北高夢ロード実行委員会

〒759-5511

山口県下関市豊北町滝部842-6

Tel: 083-252-6032

ホームページ：<http://yumeroad.org>

E-mail: kitakoyumeroad@gmail.com